HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	Jhumpa Lahiri のThe Lowland における時間と記憶
著者	渡部，あさみ; WATANABE，Asami
引用	北海学園大学人文論集(69)：97-136
発行日	2020-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

Jhumpa Lahiri の *The Lowland* における時間と記憶

渡　部　あさみ

Jhumpa Lahiri の第二作目の長編 *The Lowland*（2013）は，インドとアメリカを舞台とした 60 年に渡る一つの家族の物語であり，時間を主要な題材として登場人物たちの経験と成長やディアスポラの記憶とアイデンティティが描かれている。この物語は，1967 年に起きた西ベンガルの毛沢東主義の急進的な政治グループであるナクサライト運動の始まりを重要な起点としている。その時代にインドで仲良く育った年子の兄弟は，大学生の時に共産主義運動に関心を持つが，兄の Subhash は次第に危険を察知してその動向から離れてアメリカへと留学し，環境工学を学び博士号を取得することを目指す。一方，残された弟の Udayan の方は，インドの貧困と不平等の現状を知り，革命のために国家に対する暴力を正当化し，活動にのめり込んでいく。その結果，Udayan は警察組織に逮捕され，犯罪に加担したとして家の裏の低地で処刑される。Subhash は残された Udayan の妊娠中の妻 Gauri が実家から見放され，両親からも冷遇されていることを知り，Gauri に再婚して一緒にアメリカに行くことを提案する。再婚を決意してアメリカへと渡った Gauri は出産後，勉学を再開して哲学を学び，大学院に進学する。その後，Gauri はカリフォルニアの大学で教職を得て，Subhash と 12 歳になる娘 Bela を置いて，家を出るという選択をする。

主要な登場人物である Gauri は，インドでの過去の罪の意識と喪失体験から，アメリカに移住してもその記憶とトラウマに苦悩している。また，時間を意味する名前を持ち，過去の記憶を体現する娘 Bela を愛せず，ネグレクトに近い状態に陥る。母親の役割に対する葛藤の中で，Gauri は時間を得ることを自由を得る手段としていく。また，Gauri が大学で時間を研

究対象とし，時間と意識について哲学的に解明していくことは自己探求のプロセスとなると同時に自己実現を可能とし，経済的自立と社会的地位の獲得へと導く。しかし，その代償に孤独と精神不安を抱え，時間意識に異常が生じているGauriは被害者でもあり，加害者でもあるという両面性を持つ。本論では，GauriとSubhash，そしてBelaを中心に登場人物たちの時間と記憶について探り，分析と考察を行う。時間を考察する上で，身体的感覚や経験として身体との関係が重要となり，また，個人との関係において,時間が文化的アイデンティティの概念と同様の性質を持つことから,身体とアイデンティティの関係にも注目する。

*The Lowland*の先行研究については，これまでに主要登場人物の分析やプロットとナラティブなどに関する物語分析がある。また，ジェンダーとフェミニズム，ポストコロニアルとディアスポラ文学によるアプローチ，そして，政治と歴史，移民経験と適応，アイデンティティと文化的差異の問題などに注目して論じる研究がある。[1] 本作では，主要登場人物により時間概念および時間意識が前景化されていることが明らかな記述が随所に見られる。時間はアメリカ文化研究における主要なキーワードの一つであり，また，グローバル化するアジア系アメリカ文学の中で，アイデンティティの関係から時間と記憶の表象にさらなる注目が集まっている。[2] しかし，先行研究では時代背景となるインドの歴史的事実をベースに創作を行い，過去を語ることの意味については検討されているが，時間の表象に注目したものは調べた限り見られなかった。

時間は自然現象および社会的概念としても捉えられ，さまざまなアプローチが存在しているが，人間の体験は時間が可能にするものであり，人生も生と死を迎えるという時間の流れの中にいる。そのため，時間に対する問いは「私」について，そして自己と世界との関係に対する問いとなる(中山1-2)。本論では，時間と記憶の表象の分析を通して，過去・現在・未来との関係，アイデンティティ形成について考察し，本作に描き出される現代アメリカの個人と社会，およびその関係性を明らかにしたい。

時間・身体・記憶・アイデンティティ

「時間」の意味は豊富で多様であり，アメリカ文化研究においても定義と概念を語ることは複雑なことである。[3] 時間は自然現象として理解される側面もあるが，例えば時差によって時計をリセットして合わせるという行為は，国家が規定する時間変更に同意することであり，このことから時間は経験的事実ではなく虚構であり，社会的概念であるということになる。また，「一時性」（temporality）という言葉は，時間を社会的交渉の産物と認識するものであり，この概念は時間を脱自然化し，多様な一時性がアメリカ文化の中で作用していることを明らかにする。例えば，時計と日付，歴史的時間，物語時間，妊娠出産に関する時間や子ども時代と老化などは，全てイデオロギー的意味を含有する。このような多様な一時性は，時間がその概念に支配されており，文化的，経済的，政治的環境によって変化するものであることを示唆している。時間の規則は，新しい社会的規範だけではなく，新しい国家的アイデンティティを生み出した。

一方，Homi Bhabha は時間が単一的なものではないことから，むしろ主流文化とマイノリティ文化の間の緊張は，時間や歴史をめぐる分断をもたらしたと主張する。これまでの研究が示すように，時間は政治的問題であり，国家の枠組みを越えた概念となっている。Wai Chee Dimock は，アメリカの短い歴史を基礎とするアメリカ文学と文化に対して，国家の枠組みを越えて拡大する時間（deep time）と空間の文脈で再検討することを提案した。時間は時を越えて変化するため，時の表象，特に過去の表象も変化していく。そのため，単一的な歴史観やメタナラティブを否定し，アメリカの「歴史」の不確実性を認識し，過去と現在の複数性を強調している。

The Lowland では，Gauri の女性との短期間の同性愛関係が描かれ，このことは本作の時間意識の表象に影響を与えている。Jack J. Haberstam はクィアの時間と空間の利用は，家族，ヘテロセクシュアリティや妊娠・出産などの既存の制度や規範意識に反して発展していることを説明した(1)。そのため，クィアによる時間と空間を考察することにより，伝統的な

人々の関係性や所属，アイデンティティ，習慣や構造について理解が得られる（4)。例えば，妊娠・出産と育児は，結婚した夫婦間で，女性の「生物学的時間」(biological clock）と厳格なブルジョワ階級の規範によって規定され，計画されている。そして，多くの人々は妊娠・出産に関する時間および期間を計画することは，自然かつ望ましいことだと考えている。また，家族の時間は育児の慣習に伴う規範的な日々の生活の計画であり，この家族継承の時間は，富と所有物や価値とモラルが家族の絆を通じて次の世代に受け継がれるという世代的な時間を概観するものである。さらに，この時間は家族を国家の歴史へと，また，家族と国家に安定をもたらす未来へと接続するものであると認識されている（5)。このような規範的時間に対して，Gauri と Bela はそれぞれ育児放棄やシングルマザーを積極的に選択することにより，逸脱しているといえる。

本作では，特に Gauri に時間意識に異常が見られている。時間意識の異常や自我の解体という崩壊感覚が見られる事例による研究は，それが関係の病であることを示している（真木 216)。そして，近代以降の社会の時間意識についての議論から，時間の解体感による不安と自己喪失感は，時の一瞬一瞬がそれぞればらばらに知覚され，持続性を持たないことに対する恐怖として現れるという。現在が過去や未来と接続せず，切り離されているような感覚が，不安や自己喪失感として意識されるという現象は，自我の存在が内的な充実を失い，存在感の確実性を失っている状態である。つまり，現在の生に対する感覚や意味を失っているがために，未来や過去にさまよい出ると分析されている（真木 257-58)。このような意識の異常は，過去の体験によるトラウマから「現在」を捉えることができなくなった Gauri や孤独と喪失感から時間感覚に過敏になる Subhash の状況に当てはまるものである。

そして，Gauri が関心を持つショーペンハウアーが，時間は身体と意思の関係でより具体的に捉えられるとしていること，また，時間は身体的に経験される性質があることなどから，本論では身体感覚や身体利用にも注目する。[4] 身体においては，無意識に記憶が生きられていることから，「記

憶容器」（memory container）とする見方や，記憶の具体化がなされていることから，身体は生の時間の経験の構成物という位置づけもされる。[5] 本作でも身体が表す記憶や時間に関する身体経験は重要視されている。

Ketu H. Katrak は第三世界の女性作家作品の脱植民地化のプロセスにおける身体の戦略的な利用について研究し，身体が「疎外」（exile）の環境下に置かれていることを指摘した。疎外に関しては実際の疎外と比喩的な疎外，また，家父長制による女性の身体の内的な疎外および政治的・経済的理由による移民や地理的移動，そして発言抑制などによる外的な疎外も意味する。さらに疎外には，家父長制の中の自己疎外や自己非難，アウトサイダー（部外者）の状態も含み，そこで女性の登場人物は内的疎外により身体が自身から乖離し，身体に対して所有意識も主体性も感じられない経験をする。また，この身体のアプローチにおいては，一見して悲劇的で否定的な文脈による身体利用についても注目され，狂気，死，自殺やその他の社会的孤立などにも，それが唯一可能な抵抗の手段として，身体の戦略的な利用が確認されている。女性たちの密かな抵抗の選択は，意図的で注目すべき創造性から考え出され，自己保存のためにリスクを負い，支配に対峙するための決断となっている（2）。女性作家たちは登場人物に対する家父長制的な身体の客体化と，身体をコントロールする女性への社会文化的なパラメータに対する葛藤を描く（9）。このような作品は，文化的帝国主義を批判し，そのポストコロニアルな女性の文学的伝統が，性差による不平等と支配に抵抗し，社会変動に向けて想像的で戦略的な努力により連帯を実現し，文化と政治の再定義に影響を与えると評価されている（1–3）。上記に説明した「疎外」は，Gauri がインドやアメリカにおいても経験するものであり，身体感覚の乖離や主体性が得られない状況は全て Gauri の経験と重なっている。これは同様に息子を失った Bijoli の体験でもある。本論では Katrak の身体的疎外に対する見解も背景の分析を行い，ポストコロニアルな経験と状況による身体をめぐる個人とコミュニティへの影響についても明らかにしたい。

また，身体と記憶に関連し，「亡霊」（ghost）の表象についても検討する。

Marisa Parham は幽霊の「中間性」(in-between) や憑依の性質が越境的アイデンティティと共鳴することを指摘した。彼女は幽霊が文化・時間・空間の中間に生き，さまざまな二つの意識の間の存在を象徴するという意味で重要であるとした (3)。Kathleen Brogan も幽霊を共同体の記憶と関わる越境的な存在として説明した。共同体の記憶，文化伝達と継承の問題を中心テーマとして,「文化的憑依」(cultural haunting) の物語はプロット装置と，幽霊という過去と現在，生と死，文化と文化の中間に存在し移動する，不思議で越境的な優れた比喩を共有している (6)。さらに Annette Kuhn は写真について，人間の有限性を想起させるその「亡霊的性質」(ghostly quality) が重要であると指摘した (1)。写真は記憶の象徴として，過去を現在に呼び出す。そのため，写真を利用することは，沈黙とこれまでに表された「過去」に創造的かつ批判的に挑戦することであり，過去をめぐって新しい関係性と物語を創ることであると位置づけた (6)。写真は記憶を保存する行為であり, 沈黙と抹消に抵抗する創造的行為ともいえる。本論では，過去の時間と記憶を体現する上記のような「亡霊」の表象についても取り上げる。

Maurice Halbwachs は記憶の研究において,「集団的記憶」が特定の集団に支持され，その記憶が集団の社会的かつ心理的な絆に発展することにより構築され，維持されるものであるとした (143)。Robert N. Bellah はさらに集団的記憶の物語によって形成される「記憶の共同体」について，それが物語を共有するリアルなコミュニティに対しても貢献すると主張している。共同体には歴史があり，過去によって構成されているため，実際のコミュニティを共有する過去を忘れないために，物語を語り直しを行うことを通じてその共同体に生きた人々の意味や価値を具体化する。このような集団的な歴史と人々の物語は，記憶の共同体の伝統にとって重要となる (153)。Lahiri はインド系のコミュニティに対してインド系作家として，歴史を描くことについて役割と責任を感じていたことを明かしている。[6] 作家としてインド系の人々とコミュニティについて描き, Lahiri の物語は，一つの「集団的記憶」の構築に寄与していると考えられる。Nicole King は

記憶の物語の特徴について研究し，これらの物語には，記憶と忘却，そして自己破壊と創造をめぐる複雑なプロセスが存在し，個人的記憶は現在において再構築され，再生産されていると説明した。記憶の物語は，自己を記憶すること（remembering）が，連続的な共同体への再構成員化（re-membering）であり，時間と時間を結びつけ，暫定的で部分的な構築を行うプロセスであることを実証している（175）。このようにして，トラウマ的な過去と歴史は，人々に再読と再表象を要求するようであり，人々の記憶の終わりという忘却の一種に抵抗している（180）。Lahiri の作品も記憶の物語として同様の性質を持ち，彼女の創作は，自己をディアスポラのインド系コミュニティとの関係において過去の時間を再構築する試みであると考えられ，本作では，主に Gauri や Subhash の時間意識を通し，記憶との関わりのプロセスが表現されている。

Pierre Nora は Halbwachs の記憶の概念を援用し，記憶は歴史が過去に対する一つの表象であるのに対し，記憶は集団の数と同様に多数存在し，その性質は多様かつ複層的でありながら，特定的で個人的な性質であることを明らかにした。その上で，記憶は永続的な実際の現象であり，過去を通じて「永遠の現在」へと私たちを結びつけるものであると説明している（146）。過去に対する記憶形成に関しては Lahiri の短編作品に対する分析を通じて Joel Kuortti も注目し，「過去の所有」（possession of the past）をハイブリッドで越境的なアイデンティティの構築として解釈している。Lahiri の物語は，ポストコロニアルな文脈におけるハイブリディティの意味について解釈を提示している。その物語は時間と空間における過去と現在の所有および所有の回復のプロセスを通して，文化翻訳（cultural translation）と伝達の重要性を強調するものである。そして，物語はジェンダー化されたポストコロニアル時代に続く植民地的および家父長制的ヒエラルキーに対する抵抗の戦略となる（17）。このようなことから，登場人物の「過去の所有」も，インド系ディアスポラの中心的テーマであり，抵抗の戦略と読むことができるであろう。

上記のように，時間と記憶は現代アメリカの文化的アイデンティティを

検討する上で重視されている。Stuart Hall は文化的アイデンティティを以下のように定義し，変化と進化に特徴づけられ，時間と空間を超越するものであると述べている。

> Cultural identity...is a matter of "becoming" as well as of "being." It belongs to the future as much as to the past. It is not something which already exists, transcending place, time, history, and culture. Cultural identities come from somewhere, have histories. But, like everything which is historical, they undergo constant transformation. Far from being eternally fixed in some essentialized past, they are subject to the continuous "play" of history, culture, and power. Far from being grounded in a mere "recovery" of the past, which is waiting to be found, and which, when found, will secure our sense of ourselves into eternity, identities are the names we give to the different ways we are positioned by, and position ourselves within, the narratives of the past. (213)

ここで説明されているアイデンティティは，時間と共に変化する現代アメリカのアイデンティティの性質と同様である。本作では，このアイデンティティの探求が時間と記憶との関連において行われているという特徴が見られる。

Gauri と時間

本論では第一に，Gauri の時間を中心に時間概念と過去・現在・未来に対する意識と記憶について，他者との関係にも注目して分析と考察を行う。時間は自己の存在と切り離せない現象であるため，その存在の深刻な危機の際には，個人の時間体験が異常な様相を示す多数の研究があるという。[7] 時間意識は精神病理との関連で「アンテ・フェストゥム」(祭りの前)，「ポ

スト・フェストゥム」（祭りの後），「イントラ・フェストゥム」（祭りのさなか）という三つのタイプに分類される。そして，これらは「分裂病者の時間」，「うつ病者の時間」，「狂気の時間」という三つの精神病理に対応している。しかし，このように精神病理によって分類された時間意識は，その病を患う者だけが体験するものではない。人々はこれらの三つの時間への関わり方をそれぞれ経験し，それらの均衡の上に生きている。

Gauri は生来時間に対して特別な感覚と関心を持ち，時間意識や感覚に問題を抱えている。その病的な時間意識下では，均衡が著しく欠いており，Gauri の精神不安と自己存在の不確実性を表している。Gauri は生まれつき地図のように頭の中で時間を描いていた—“She had been born with a map of time in her mind”（130）．Gauri は，時間に対して明確なイメージを持ち，時間は過去から現在，そして未来へとつながる地平線のように思い描かれている。最近の過去から Udayan に会った頃と出会う前，Gauri の生まれた年とそれ以前を描く地平線上では，Udayan と出会ったことが Gauri の人生において最も重要な出来事として位置づけられている。この地平線のイメージでは，過去と未来が Gauri を内包している—“Her strongest image was always of time, both past and future; it was an immediate horizon, at once orienting and containing her. Across the limitless spectrum of years, the brief tenancy of her own life was superimposed. To the right was the recent past: the year she'd met Udayan, and before that, all the years she'd lived without knowing him. There was the year she was born, 1948, prefaced by all the years and centuries that came before”（131）.

上記のように時間の流れは線形でイメージされ，未来は左にあり，Gauri の死を一つの点として，さらに続いていく。胎児は既に心拍があり，9 ヶ月で産まれ出て来ることは決まっていて，その子の人生の「線」は既に始まって未来へと伸びている。一方，Udayan の人生の「線」は Gauri の心の中の「墓」で終わり，一緒に伸びてはいない—“To the left was the future, the place where her death, unknown but certain was an end point. In less than nine months a baby would come. But its life had already started, its

heart already beating, represented by a separate line creeping forward. She saw Udayan's life, no longer accompanying her own as she'd assumed it would, but ceasing in October 1971. This formed a grave in her mind's eye" (131).

しかし，Gauriにとって「現在」だけは全体像を欠いていて，「見えない点」(blind spot) となっている。Gauriの異常な時間感覚は身体に影響し，不安を感じ，日々や月が終わって欲しいと考えている。「現在」は彼女の理解を逃れているが，未来は見え，「線」は伸びている。時間は静的かつ動的であり，意思と反対に絶え間なく増殖していく。そのような状況の中で，Gauriは時間に対して主体性は得られず，身体もコントロール不能の状態に陥っている—"Only the present moment, lacking any perspective, eluded her grasp. It was like a blind spot, just over her shoulder. A hole in her vision. But the future was visible, unspooling incrementally. She wanted to shut her eyes to it. She wished the days and months ahead of her would end. But the rest of her life continued to present itself, time ceaselessly proliferating. She was made to anticipate it against her will" (131).

Gauriの時間意識の異常は身体感覚の異常も併発させている。時間は止まっているようで過ぎていくように感知され，息苦しさがあり，体が酸素を取り込み，Gauriは強制的に生かされているように感じている—"There was the anxiety that one day would not follow the next, combined with the certainty that it would. It was like holding her breath, as Udayan had tried to do in the lowland. And yet somehow she was breathing. Just as time stood still but was also passing, some other part of her body that she was unaware of was now drawing oxygen forcing her to stay alive" (131). ここではGauriの未来の「未知なるもの」に対する不安が強く現れ，生への欲求も失い，生きていることが身体的負担として感じられている。

Gauriがアメリカに渡るために航空機で移動した際には，彼女は時間に対する意識の集中があり，空間ではなく，時間を旅しているという感覚があった。航空機の中では行動が制限され，Gauriは「監禁」されているよう

に感じていた。Subhash と再婚して渡米するという Gauri の選択は，彼女の置かれた環境においては他に選択肢がない中で行われたものであったと考えられ，航空機の中の不自由さは彼女の境遇と心理状況を比喩的に表現しているようである。乗客は飛行機の中に目的地まで閉じ込められ，見知らぬ大気中に遊離している感覚があった—“On the plane time had been irrelevant but also the only thing that mattered; it was time, not space, she'd been aware of traveling through. She'd sat among so many passengers, captive, awaiting their destinations. Most of them, like Gauri freed in an atmosphere not their own” (147).

この時の Gauri は Udayan の子を妊娠しているが，計画外の望まない妊娠に対して Gauri は消極的かつ受動的であるように見える。胎児との関係にも距離感が生じており，自身の身体からの乖離や疎外の感覚を持っていて，身体に対する主体性を持たない。胎児を it と表し，異物のように身体の内なる他者として認識している。胎児は Gauri と一体のようでもあり，遠く離れているように感じられるあいまいな身体感覚が語られ，後述するように Udayan の亡霊というイメージも持っている。アメリカの新しい環境は it（胎児）に影響を与えるのであろうかと考えていた—“Gauri's body remained its world. She wondered if the new environment would affect it in any way. If it could sense the cold” (147).

アメリカに連れてきた Gauri を気遣う Subhash は，彼女をインド系コミュニティのホームパーティーに連れて行く。しかし，Gauri はそこにいる人々と自分には共通点がないという理由から，それ以上の付き合いを望まなかった。Gauri は大学の図書館に通い始め，哲学の授業を聴講するようになった。また，アメリカ人女子学生を観察するようになると髪を切り，サリーを引き裂いてスラックスを履くようになり，外見が変化していく。出産後は乳児の育児期間を経て，Gauri は Bela を Subhash に預け，さらに多くの時間を大学と図書館で過ごすようになる。Gauri は図書館で勉強や読書に集中していると，匿名性を得て役割と義務の意識が取り除かれ，時間が過ぎていくのを忘れられた—“There were no classes that term during

the time Bela was at school. Instead Gauri walked over to the library, to sit and read. The effort of concentration eliminated, if only for an hour or two, the obligation of anything else. It eliminated her awareness of those hours passing" (178).

Gauri は特異な時間感覚を持ち，Gauri は時間を「視る」ことができ，その時間意識について自身で理解を深めようと試みていた—"She saw time; now she sought to understand it. She filled notebooks with her questions, observations. Did it exist independently, in the physical world, or in the mind's apprehension? Was it perceived only by humans? What caused certain moments of days? Did animals have a sense of it passing, when they lost a mate, or killed their prey?" (178). Gauri は時間の概念や意識についてノートに疑問や観察を書いて埋め，自問しながら学問的に探求するようになる。時間に関する歴史的な議論を学んで辿り，異なる思想を横断し，比較検討した。古代ギリシャ思想，ヒンズー教，デカルト，時計と日付などから時間を観察し，それは異なる時間意識と社会的概念としての時間の実態を明らかにするプロセスとなる。Gauri は古代・中世の時間論における主要人物であるアリストテレスやアウグスティヌスについて言及しており，時間に対する彼女の関心事が重ねられていると考えられる。アリストテレスは時間について，その存在や性質，連続性，前後関係などの問題を解決しようとし，アウグスティヌスは過去・現在・未来を，それぞれ記憶・注目・予期として考えた。[8] Gauri はヒンドゥー教の中では，時間は死の神として擬人化され，神には時間の区別が存在せず，過去・現在・未来の時が同時に存在すると考えられ，デカルトは『第三省察』で神は瞬間ごとに身体を再創造したことから，時間を持続性のあり方と捉えている。また，太陽と月の動きで時間と昼夜を決定する地球の時間であり，そして，その仕組みから考案されたものが時計とカレンダーとなる。上記のように Gauri は古代と近現代，東洋と西洋の思想と哲学などから，多角的に時間の概念に迫り，思考実験を重ねていた。

さらに，Gauri は過去のノートから，Udayan とはかつてインドでニュー

トンやアインスタインによる自然科学的時間について語り合ったことを思い出していた。ニュートンは時間が絶対的な存在で一定の速度で進行するとし，アインスタインは時間と空間の相互関連性を説明した。Udayan は粒子，速度，瞬時の出来事，時間反転不変性など物理学的視点から時間を観察していた—“In one of her notebooks from Calcutta were jottings in Udayan’s hand, on the laws of classical physics. Newton’s theory that time was an absolute entity, a stream flowing at a uniform rate of its own accord. Einstein’s contribution, that time and space were intertwined. He’d described it in terms of particles, velocities”（179）．Gauri はアメリカの大学で後に哲学を学び，現象学的観点から時間の概念や意識について分析していたことから，Udayan の時間に対するアプローチとは異なっていたことを示唆している。この二人の時間に対するアプローチの差については，男女の時間認識をめぐる相違による影響も考えられる。時間については，女性学的観点から見ると，女性の時間と男性の時間は，男性的偏見（masculine bias）により伝統的な歴史的時代の区分化から女性の家事のリズムにいたるまで，文化的に異なることが指摘されている（Rohy 244）。

Gauri は捉えることができない「現在」の時間についても注目していた。現在は起きては消え，生でも死でもなく，常に流動的であり，捉えた瞬間にすり抜けていくようであった—“The present was a speck that kept blinking, brightening and diminishing, something neither alive nor dead. How long did it last? One second? Less? It was always in flux; in the time it took to consider it, it slipped away”（179）．一方で，未来の時間は Gauri に取り憑き，彼女を生きさせて生命を維持したが，心身を消耗させてもいた。新しい年は毎年，何も書かれていない日記から始まるが，日記は冊子化された時計であると考えており，時計が象徴している共同体的時間や制度的時間に対する Gauri の身体的反応と見ることができる—“The future haunted but kept her alive; it remained her sustenance and also her predator. Each year began with an unmarked diary. A version of a clock, printed and bound. She never recorded her impressions in them. [...]. Even when she

was a child, each page of a diary she had yet to turn, containing events yet to be experienced, filled her with apprehension. Like walking up a staircase in darkness. What proof was there that another December would come?" (179).

Gauri は未来に対する不安を抱え，本来日記に書くべきようなことは書かず，代わりに日記に作文を書いたり計算を行なったりしていた。未来が恐怖の対象となる，この時間意識は前述の「アンテ・フェストゥム」であり，「分裂病者の時間」と分類されている。「アンテ・フェストゥム的時間意識」では，未来を強調した時間把握が特徴となり，この時間感覚において，現在は変革の対象として打破され，乗り越えられるべきとされる。そして，生きることは革命的な行為の連続として捉えられるため，自己もまた変革されるべき対象となる。この意識下では現在にいる自分自身および過去や経験が否定に発展することがあり，一般に現在の自己に対して否定的な態度を取る傾向がある（木村 72–73)。このような時間意識を持つ人々にとって未来は，強い願望や憧れであると同時に未知なるものとして，それがまだ現れていないために恐怖を抱くと分析されている（木村 87)。アンテ・フェストゥム意識あるいは未来先取的な時間構造は，精神病症状に限ったことではなく，未来が未知のものであり，また，人間の有限性により死に結び付けられるものとして，憧憬と恐怖を誘うということは多くの人々においても同様である（木村 95)。

近代社会の特徴として，社会の基礎的な産業と経済システムにより，社会全体の生活が一般に時間的に編成され，これは時計化された生の全社会的な浸透と説明される（真木 286)。時計を基準にした現在の時刻の告示は，個人より共同体に向けられるという性質がある。つまり，ここで告示される時間は，私的・個人的な時間ではなく，制度的時間ともいうべき公共の時間であり，共同体的時間となる（木村 57)。Gauri は時計について注目し，拒否感を示している。上述のように時計による時間を考えれば，Gauri は経済効率による時間編成を目的とし，共同体の制度的時間の象徴となる時計に対して抵抗を表していると見ることができる。

Gauri は Bela の時間意識と概念も観察し，英語とベンガル語の言語の相違を比較している。Bela は 4 歳で記憶を形成し始め，yesterday という単語がボキャブラリーの中に入ってきた。英語の yesterday が表す過去は一方向に進むが，ベンガル語の kal という語では yesterday が tomorrow の意味を合わせ持ち，形容詞または動詞の時制によって過去か未来を文脈で理解する。現在だけを捉えることができない Gauri は昨日と明日を指すことができても，今日を表さない kal に表されるような心理状況にあると見られる。幼い Bela にとって時間は逆方向にも流れることが可能であり，yesterday の意味は，現在に起きていないことを広く指し，過去は崩れて序列がない—“The word *yesterday* entered her [Bela's] vocabulary, though its meaning was elastic, synonymous with whatever was no longer the case. The past collapsed, in no particular order, contained by a single word. It was the English word she used. It was in English that the past was unilateral; in Bengali, the word for yesterday, *kal*, was also the word for tomorrow. In Bengali one needed an adjective, or relied on the tense of a verb, to distinguish what had already happened from what would be. Time flowed for Bela in the opposite direction. *The day after yesterday*, she sometimes said” (176).

ここで Gauri が言及する kal はインドの時間に関する思想と歴史も反映している。kal はインドの時間概念を表す語〈カーラ〉の動詞の派生語であり，時間・カーラは，バラモン教の儀式典礼における造物主プラジャーパティの最高神の父であり，一切万物の根源とされている。[9] Subhash が名付けた Bela という名前も時間を象徴し，少し発音を変えると時間・期間という意味を持つ。Bela は一日の朝・昼・夜の時間の別を表現するのに使用される語である—“Pronounced slightly differently, Bela's name, the name of a flower, was itself the word for a span of time, a portion of the day. *Shakal bela* meant morning; *bikel bela*, afternoon. *Ratrir bela* was night” (176). Bela の「昨日」は彼女の心の中に記憶されているさまざまな出来事の「容器」となり，経験も印象も全て既に起こった事を広く指す。彼女

の記憶は簡潔で限られ，時系列を欠き，ランダムに再配置されている―“Bela's yesterday was a receptacle for anything her mind stored. Any experience or impression that had come before. Her memory was brief, its contents limited. Lacking chronology, randomly rearranged”（176）.

Gauri は Bela の時間感覚においては，過去が現在と混じり合うことを理解する。Gauri にとって5年前はまだ Udayan と結婚していた頃で，Bela の時間認識が現実だったら良いのにと想像する―“At times Gauri derived comfort from Bela's version of history. According to Bela, Udayan might still have been living the day before, and Gauri might still be married to him, when really almost five years had passed since he was killed. Almost five years, she'd been married to Subhash”（180）. Udayan は社会が変化する未来を信じて命を捧げる結果となり，Gauri と Udayan が夫婦として生きていく未来は絶たれた。しかし，Gauri はその時間に戻りたいと考え，過去の時間に意識が向いてしまう。

このように過去が現在に影響を与えているという感覚は,「ポスト・フェストゥム的時間意識」として解釈できる。「ポスト・フェストゥム」は「うつ病者の時間」であり，過去を中心とした志向であることが特徴である。この時間意識においては，楽園のように感じられるような安定した状態が永遠に続いて行くという時間把握を前提とし，そこから転落し，二度と戻ることができないという後悔と絶望による精神状態があるという（中山 236-37）。また，うつ病の発病状況においては「所有の喪失」が特徴として見られ，深刻な危機に直面し，自己の存在を支えてきた秩序が失われる。その際の所有の対象は，職場や家，家族やその他の親しい人々であり，喪失には多様な事例が見られる（木村 111）。うつ病者には後悔と自責が見られるが，この現象は時間が全体としてポスト・フェストゥム的に「取り返しのつかない未済」の状態として認識されている。その過去からの巨大な未済の蓄積が現在に影響し，未来へと続く怖れるべき問題として経験される（木村 114）。Udayan が秘密裏にナクサライト運動に参加した結果，Gauri が罪の一端を担ってしまったこと，また，Udayan が警察に銃撃され

て死んでしまったことは Gauri に禍根を残している。そして，Bela の誕生の事実もその苦い過去に留まり，Gauri は真に受け入れられていなかったことが示唆される—“Bela’s birth, on the other hand, remained its own yesterday for Gauri”（180）.

自宅のテラスから目撃した Udayan の死は，彼女のヴィジョン（視野）に穴を開けていた。そのトラウマ的な経験は，時間よりトリーガンジとロードアイランドを隔てる空間が保護し，彼女の視野が海と大陸のように広がった。時間は後退して，次第に見えなくなり，忘却されようとしているように見られる—“What she’d seen from the terrace, the evening the police came for Udayan, now formed a hole in her vision. Space shielded her more effectively than time: the great distance between Rhode Island and Tollygunge. As if her gaze had to span an ocean and continents to see. It had caused those moments to recede, to turn less and less visible, then invisible”（180）.

Gauri には兄の Manash から時折手紙が届いたが，兄の友人として知り合った Udayan を思い起こさせるので読むことを拒んでいた。Gauri はインドでの過去を思い出したくないと考え，その時の時間は「指で潰した被膜の残滓」と表現し，無意味なものとして，この過去を記憶をすることを拒絶している—“A time she’d crushed between her fingertips, leaving no substance, only a protective residue on the skin”（181）．ここでは，Gauri の心理背景として Udayan との出会いを後悔しているように見られる。忘却も記憶との関わりの一形態であり，Gauri が意図する過去との関係のプロセスになっている。

Udayan と同様に，Gauri には Bela も過去の象徴となっており，育児は辛く苦しいものと感じられる。育児に目的意識を持てず，うつ状態となり，時間を一緒に過ごすことを避け，自分のために平日や週末も時間を費やすようになる。子どもとの時間は容易に過ぎていかず，身体的な疲労を強く感じるが，そのように消耗してしまう理由が自身でも理解できないでいた—“With Bela, she was aware of time not passing; of the sky nevertheless

darkening at the end of another day. She was aware of the perfect silence in the apartment, replete with the isolation she and Bela shared. When she was with Bela, even if they were not interacting, it was as if they were one person, bound fast by a dependence that restricted her mentally, physically. At times it terrified her that she felt so entwined and also so alone" (193).

Bela とは身体的な一体感があり，心身共に束縛と制限を受けていると感じ，二人で過ごしていると孤独に満ちていると感じた。一方で，周囲の人々は親になると生活は一変し，時間意識も子ども中心に変化すると話す—"With children the clock is reset. We forget what came before" (198). Gauri は母親としての規範的な時間意識に触れ，プレッシャーを感じていた。Bela と過ごす時間は無駄に過ぎているように感じ，そのことは他の母親たちと比較して罪悪感を覚えさせた—"Another mother, spending the time with her, might not have considered it a waste" (202). また，Subhash が自分とは異なり，Bela との時間を楽しんでいる様子を見ることも不安を覚えさせた。Subhash も Gauri の Bela に対する愛情を疑問視し始めるようになり，Gauri に母として役割同一性に問題が生じていることを意識するようになった。Udayan から残された最後の長時間を要する任務である子育ては，Gauri の人生に意味と価値をもたらさず，Gauri 自身が次第に Bela を5年の時間をかけて育てても比例的に絆や愛が生じることはないと実感するようになった—"But it was not turning up; after five years, in spite of all the time, all the hours she and Bela spent together, the love she'd once felt for Udayan refused to reconstitute itself. Instead there was a growing numbness that inhibited her, that impaired her" (195). 娘を愛せないという事実は Gauri の精神を蝕み，身体的不調を引き起こしていたが，そのような役割意識に反して，自由な時間を求める欲求はさらに高まっていった。

Gauri は Subhash が仕事から帰るのを待ち，戻るとすぐに Bela を預けて授業や図書館へと出かけ，学びに費やす時間が増えていった。同時期に Gauri は，時間概念や時間意識に対してさらなる関心を持ち，学問的に追

究するようになる。大学でニーチェとショーペンハウアーによる「円環的時間」の比較研究をし，作成したレポートが教員から評価されたことを契機として哲学研究の道へと進む。ショーペンハウアーは，世界の根源が非合理的な生への意志と解釈する非合理的主意主義，退廃的ロマン主義，ペシミズムを特徴とし，ニーチェはニヒリズムや永遠回帰などの考えで知られ，これらは Gauri の思想に影響を与えていると解釈できる。[10]

また，Bela が Gauri の書棚に見つけたフッサールの『内的時間意識の現象学』が示唆するように，ショーペンハウアーやフッサールの主題は「時間」そのものではなく，人間の内部にある「時間意識」である。その議論においては，時計で測られる客観的な物理的時間は物理的世界や自然現象の存在を前提とするが，哲学的考察を行うためにはこれらの前提から自由にならなければならないとした（中山 45–47）。これらの情報から，Gauri が時間の概念の中でも，とりわけ時間意識について関心を持っていることがうかがえる。

そして，この頃 Gauri は次第に保護責任を無視して，Bela への危険を顧みず外出する機会を少しずつ増やし，密かに自分の時間を得ることに快感を覚えていった。Bela には理由を考え出し，特段必要に迫られなくとも準備を行い，束の間の一人時間を確保しようとした—“The five minutes doubled to ten, something a bit more. Fifteen minutes to be alone, to clear her head. It was time to run across the quadrangle to the library to return a book, a simple errand she could have done at any time but that she was determined to accomplish at that moment. […]. Time to speculate that, without Bela or Subhash, her life might be a different thing” (207–8).

Bela を置いて出かける時間とその回数は増えていき，Bela と Subhash がいない人生について思いをめぐらす時間にもなっていった。Gauri にとってその時間は「挑戦」の時間であり，パズルを解くような刺激をもたらし，頭がすっきりした—“It turned into a dare, a puzzle to solve, to keep herself sharp. […]. Disoriented by the sense of freedom, devouring the sensation as a beggar devours food” (208). Gauri は自由な時間を求めて

分別を失い，役割からも解放されたかった。それは激しい空腹から食べ物を貪るような身体的欲求として描かれている。このGauriの行動の背景には「イントラ・フェストゥム的時間意識」の特徴がある。「イントラ・フェストゥム」という時間への関わり方は，陶酔の中で時間経過を忘れてしまう状態を指す。物事に夢中になり，義務や役割を忘れ，過去や未来に対して関心が及ばず，現在に集中してしまう。この現在に熱狂した刹那的で享楽的な時間意識は癇癪や躁病と関連づけられている（中山237-38)。Gauriは再婚し，アメリカへと連れ出してくれたSubhashに対して深く感謝していたが，彼に対する愛も生じることはなく，SubhashとBelaの存在は彼女にとって自由を制約するものとなり，負担と感じられていた。

Belaが小学生になり，Gauriが大学院に進学すると，Gauriは自宅の「オフィス」と呼ぶ自室で論文を書き，Belaに多くの時間を一人で過ごさせるようになった。それは，Belaを心理的なネグレクト状態に置くこととなり，Gauriが自室にいる時間は母親が不在である時と同様に行動するように言い渡していた。平日や週末さえも自室に閉じ籠り，Belaは何時間も母が立てる物音と気配だけを感じて孤独な毎日を過ごした—“Hours would pass, the door not opening, her mother not emerging. Occasionally the sound of a cough, the creak of a chair, a book dropping to the floor”（238）. Belaは家で一人の時間を過ごしていたために，Belaの手元にその時の写真はない—“It was with her mother that she spent most of her time during the week, but there was no picture of Bela’s time alone with her”（239）. 写真は記憶の象徴となるものであり，過去の時間を保存･記録することによって，記憶させる目的を持つ。写真は過去の産物であるため，記憶そのものより「想起」（remembering）を導く機能を果たす（Ruchatz 370-71)。Gauriが写真を撮らず残していないことは，Belaとの時間を記憶しようとする意思がないことを意味している。Belaは次第にこの状況を知ったならばGauriを咎めるであろうSubhashに隠れ，母に時間を与えているという意識を持つようになる。そのため，母と離れて時間を過ごし，その時間をめぐる秘密を共有していることがBelaにとって，逆説的に母子を結ぶ

絆となると考えていた—“And so, until they moved away from campus, these afternoons remained a bond between Bela and her mother, a closeness based on the fact that they spent that time apart. She'd given her mother those hours to herself, not wanting to fail at this, not wanting to threaten this link” (243).

Bela が母からの愛情を求める一方で，Gauri は Subhash と Bela がインドへ帰省している間に家出を決行し，大学で教職を得たカリフォルニアで新生活を始めた。ロードアイランドからカリフォルニアへと移動することにより生じた東海岸と西海岸の「3時間」の時差は，巨大な物理的な壁となって Gauri の新天地での生活を守ってくれるように感じられた—“She entered a new dimension, a place where a fresh life was given to her. The three hours on her watch that separated her from Bela and Subhash were like a physical barrier, as massive as the mountains she'd flown over to get here. She'd done it, the worst thing that she could think of doing” (277).

Gauri は，これまでの時間の中で別のヴァージョンの自己を形成し，未亡人，義理妹，妻，母から子どものいない女へと変化してきた。アメリカで暮らす時間は彼女に選択と変身の機会を与え，Subhash と Bela を犠牲にして自らの力により，カリフォルニアでの第二のアメリカ生活への道を切り開いた—“It was not unlike the way her role had changed at so many other points in the past. From wife to widow, from sister-in-law to wife, from mother to childless woman. With the exception of losing Udayan, she had actively chosen to take these steps. She had married Subhash, she had abandoned Bela. She had generated alternative versions of herself, she had insisted at brutal cost on these conversions. Layering her life only to strip it bare, only to be alone in the end” (287).

アメリカは伝統的価値観の呪縛から Gauri を解放し，機会を与える場所として描かれている。移民である彼女が学問とキャリアを追求するプロセスには，人種・ジェンダーによる差別の影響は描かれていない。コルカタで別の自分が背負っていた伝統的家父長制度による自己の役割と責任を放

棄する選択が，変化を可能にした。Gauriは大学院で，ヘーゲルとホルクハイマーにおけるフェミニズム的観点における解釈的分析の方法をテーマに博士論文を書いていることから，家父長制と伝統的価値観の影響を受ける自分の状況が客観視されていることがうかがえる。

このような変化を遂げて自立を獲得したGauriは，過去との関わり方も変化する。Gauriは長い間封印してきた過去をよみがえらせ，時空間を超越する感覚を経験する。故郷から遠く離れたアメリカのカタログから注文したテラス用のテーブルの木材の香りが，故郷でUdayanと生活した家にあった家具の香りと同じであった。これまでは必死に過去から逃避してきたが，この体験は過去の記憶を現在へと呼び出し，受容と懐古のひと時を与えた。記憶をよみがえらせる優しい香りによる身体的経験は，時間と空間の距離を縮め，郷愁を覚えさせた―“The aroma of the table wasn't as powerful, as constant, as that of the other furniture had been. But now and then it rose up as she sat on the patio, enhanced perhaps by the sun's warms, or circulated by the Santa Ana winds. A concentrated peppery smell that reduced all distance, all time” (289).

また，60代を迎えたGauriが生きる現代のアメリカの環境では，グローバル化とテクノロジーの進化により，過去の情報がかつてよりアクセスしやすく，現在へと容易に時間を超えて呼び出すことが可能になり，その空間的距離を縮めている―“She [Gauri] reads the day's headlines. But they might be from any day. A click can take her from breaking news to articles archived years ago. At every moment the past is there, appended to the present. It's a version of Bela's definition, in childhood, of yesterday” (329).

Belaの子どもの頃の時間感覚のように過去が近くなり，この頃からGauriが取る一連の行動は，彼女が封印してきた過去に直面しようとする行動に変化していく。アメリカでインド系の学生が彼女にナクサライト運動について研究目的で情報を得るために訪ねて来る。GauriはUdayanの犯罪を十分な自覚なく手助けしてしまったことに対する罪の意識から警戒するが，学生を助けるためにインタビューを承諾することに決める。過去

が忘却しようとしても逃れられずに Gauri に迫ってくる様は，過去が忘却に抵抗し，記憶化を求めているように見える。

また，Gauri は長年の別居の末に法的関係を整理しようとした Subhash から手紙により正式に離婚を求められ，郵送を頼まれていた書類を直接会いに行き，手渡そうとする。Gauri はロードアイランドの Subhash の家を予告なく訪ね，思いがけず Bela とその 4 歳の娘 Meghna に会う。しかし，30 数年を経て再会した Bela から夫と娘を捨てて家出した過去を非難され，打ちひしがれた Gauri は発表するはずであったロンドンで行われる学会をキャンセルし，コルカタへと飛んだ。コルカタの雑踏の中の車内で，Gauri は，サリーを着て大学に通う過去の自分を見たような錯覚を覚える—“She sat in the car, in snarled traffic, the atmosphere heavy with smog. She saw a version of herself, standing on one of the crowded busses, hanging on to a strap, wearing one of the cotton saris she'd worn to college”（381）．故郷は大きく変化しており，現代的なコンドミニアムの住居が立っていた。Bela に家出した Gauri は Udayan と同様に死んで過去に消えた人間と同様であり，価値がないと言われたことが繰り返し思い出され，自己否定が内面化されていく。Gauri は自分の時間（＝人生）をコルカタで終わらせようとする—“It would take only a few seconds. Her time would end, it was as simple as that”（386）．Gauri が死を数秒の出来事であり，簡単なことと言い聞かせているのは，自身を時間の地平線の「線」上にイメージし，そこにリアルな身体感覚と自尊心がなく，生きることの意味を見失っているからであると考えられる。しかし，バルコニーに立ち，自殺を実行しようとした時，Gauri は初めて「現在」を見る不思議な経験をする。目を瞑ると心が空っぽになったようになり，現在の時間のみ存在する感覚があり，その瞬間を捉えて目を逸らせなかった—“She closed her eyes. Her mind was blank. It held only the present moment, nothing else. The moment that, until now, she'd never been able to see. She thought it would be like looking directly at the sun. But it did not deflect her. Then one by one she released the thing that fettered her”（387）．それは，これまで彼女

を拘束し，束縛していたものを一つ一つ解放する体験でもあった。Gauriは死を覚悟し，行動に移そうとしたその瞬間の時間を写真のようなイメージで捉えている―“A final image: Udayan standing beside her on the balcony in North Calcutta. Looking down at the street with her, getting to know her. Leaning forward, just inches between them, the future spread before them. The moment her life had begun a second time. She leaned forward. She saw the spot where she would fall. The moment of losing him. The fury of learning how he'd implicated her. The ache of bringing Bela into the world, after he was gone. She opened her eyes. He was not there”(387).

バルコニーでは，Udayanが一緒に横に立っていた。Gauriは記憶の一瞬一瞬を思い起こし，少しずつ身を乗り出した。心中で過去と現在の瞬間を行き来し，Udayanを失った瞬間を思い出し，彼がGauriを自分の罪の共犯にしたことへの怒り，Belaを出産した時の痛みを思い出していた。そして，ついに最後に目を開けた時Udayanはいなかった。この時，Gauriは過去に抑圧していた感情を解放し，これまで目を背けていたUdayanに対する思いと真実を見つめているようである。「現在」を初めて見た体験は，Gauriの歪んだ時間意識が修正されていく機会となったように見られる。

Subhashと時間

次にSubhashの時間意識を中心に，BijoliやBelaとの関係も取り上げて検討する。SubhashはGauriと再婚してインドを後にしてから一度も故郷に戻っていなかったが，Subhashの父が亡くなったことを機に約12年を経てインドを訪ねる。SubhashのBijoliはUdayanの死後，悲嘆に暮れて精神を病み，近隣の人々から亡霊のように見られ，時間意識にも異変が生じていた。BijoliはUdayanを亡くし，もう一人の息子であるSubhashもUdayanの妻であったGauriと反対を押し切って再婚し，アメリカに渡ったことに深く失望していた。

このような辛い経験から，現実を離れたように生気なく過ごしている。彼女の日課は Udayan が警察に射殺された低地に歩いて行き，Udayan の霊に話しかけ，ゴミを拾ってきれいにすることである。Bijoli は，このように日々弔うことにより，ようやく彼女の時間が過ぎていくと感じている—“The task satisfied her. It passes the time”（226）．Bijoli を訪ねた Subhash と Bela は，Bijoli がどのように時間を過ごしたいのか手がかりを探ろうと観察する。しかし，部屋には Udayan と夫の二枚の写真とレシートしかなく，本も趣味を表すものも何もない。Bijoli はバルコニーで家を背にして手すりをぼんやり眺めて座り，何時間でも過ごしていた—“No books, no souvenirs from past journeys, nothing to indicate how her grandmother liked to pass time, for hours she sat on the terrace, her back to the rest of the house, staring through the grille”（236）.

唯一飾られている写真だけが過去の記憶を留めており，Bijoli の関心事が過去にあり，過去の時間に止まって生きていることを表す。写真は記憶との関連で考えると，過去の特定の一瞬を見せるものとして存在し，「非永続性」（fugaciousness）を強く印象づける。つまり，存在したものがもう既にないのにも関わらず，その状態のままで見られるために残されている。この複雑な過去/現在および存在/不在の混在は，写真をその他の表象とは異なり，特徴的なものとしている（Ruchatz 370-71）。

Subhash も変わり果てた母の姿を見て，母が辛い現実が耐え難く「別の時間」（305）に住み，現世を生きていないように感じられた—“He saw that his mother was dwelling in an alternate time, a more bearable reality”（263）．母の心に Subhash は存在せず，彼は既に見離されてしまったような哀しさを覚えた。彼女の心は荒野のように形がなく不明瞭で，全て取り込まれてしまったようであった—“Her mother’s mind was now a wilderness. There was no shape to it any longer, no clearing. It had been overtaken, overgrown. She’d been converted permanently by Udayan’s death. That wilderness was her only freedom”（254）．心の荒野への逃避を唯一の自由とする Bijoli の姿は，前述の Katrak による身体的抑圧に対す

る抵抗という作家の身体利用に照らして理解することができる。

Subhashは子どもの頃には何時間も母と座って過ごしていたのに，反対を押し切ってGauriとアメリカに渡ってから，長年母を避けて暮らして来たことを振り返り，後悔する―“He understood that perhaps he no longer existed in his mother's mind, that she'd already let go of him. He'd defied her by marrying Gauri; for years he'd avoided her, leading his life in a place she'd never seen. And yet, as a child, he'd spent so many hours sitting by her side”（263）．Subhashは自責の念から，少しでも失われた時間の埋め合わせをしようと，その後3年間コルカタに通い続け，母と座り，新聞を読み，お茶を飲んで一緒の時間を取り戻そうとする。Subhashには，Bijoliと時間を共に過ごすことが過去の時間を取り戻し，母に償う行為となっている。

アメリカでのSubhashはBelaが自立して家を離れ，また，彼から距離を置いていることに孤独を感じていた。大学院時代の友人Richardとの再会の直後に彼が亡くなってしまったことも喪失感を増幅させた。Richardの葬式から不眠になり，彼の死に気が沈んでいた。心に不安があることを自覚し，死に接してSubhashも人生の残りの時間を意識する。Belaに隠してきた出生の秘密についての悩みも深まり，不眠状態に陥った。Subhashも，前述のうつ病的時間構造の特徴とされる所有に対する喪失感と未済の過去が現在へと押し寄せるような時間感覚の異常に悩まされるようになる。過去と現在の時間意識の変化に注目するようになり，Belaの乳児期の時間感覚を思い出す―“He remembered Bela as an infant, when the distinction between night and day did not exist for her: awake, asleep, awake, asleep, shallow alternating phases of an hour or two. He'd read somewhere that at the start of life these concepts were reversed, that time within the womb was the inverse of time outside of it”（299）．胎児が子宮で過ごす時間は人とは逆の時間であるとされ，１，２時間ごとに寝て起きていた乳児のBelaに昼夜の時間の区別がなかったことを思い起こす。Subhashは人の成長や老化が時間意識を変化させることを実感し，時間の

過ごし方に困難が感じられていた。若い時は起きていることがあっても問題なく時間を過ごし，本を読み，外に出て星を眺めて散歩をしたいと考え，体力があってエネルギーに満ちていたと回顧する。

Subhash は精神不安による不眠も影響し，現在の時間意識に問題を抱える中，眠れない時間に故郷の家族との記憶が繰り返し思い出された。彼は過去の奥深くに入り，インドでの少年時代の記憶の残骸を調べているような感覚があった。息苦しさを伴う身体的不調を覚え，生の感覚が過剰に鋭くなり，目が冴えて深く眠れなかった。過去の記憶の断片は Udayan を形成し，その記憶は昔に流れて消えて行ったが，また現れて再構築されていた—“These minor impressions had formed him [Udayan]. They had washed away long ago, only to reappear, reconstituted” (300). Udayan の存在は Subhash だけではなく，Gauri と Bijoli の心の内にも繰り返しよみがえってきていた。Udayan を想起することにより過去が現在へと迫り，その時に去来したのは，Udayan について Bela に真実を明かさなければならないという責任感であった—“It was the greatest unfinished business of his life” (301).

一方，Bela は母の不在に悩み，思春期に精神的な病を抱えていたが，成長して大学で Subhash と同じ環境工学を学んだ。大学卒業後は，地域の農業を支援し，地元農民を守る活動に積極的に取り組む Bela の姿に Subhash は政治活動に熱心であった Udayan の姿を重ねて気がかりであった。Bela は農場で働き，自由でノマド的なライフスタイルを実践し，その生き方を母に対する反抗であると考えていた。Bela は自分を捨てた母の影響の重大さを認識し，母の不在がもたらした心の傷が消えてなくなることはないことも受け入れた。成長した Bela と時間の関係は，ライフスタイルに沿ってコントロールされているように見える。自分のために一人の時間を必要としてそれを確保する習慣を得て，趣味の時間を持ち，心を平静に保つ方法を身につけている—“Still, she required a certain amount of time to herself, so that even during the course of her visits she would stay up late after he’d gone to bed, baking loaves of zucchini bread, or she would

borrow his car and go for a drive, not inviting him to go with her" (267-68). 大人になったBelaは自分の人生を振り返り，Subhashから自立して過ごした年数を数えて見直し，客観的に捉え，時間的に異なるペースで生きて行くために次の計画を立てようと思案する—"At this point she's lived nearly half her life apart from him [Subhash]. Eighteen years in Rhode Island, fifteen on her own. She'll be thirty-four on her next birthday. She craves a different pace sometimes, an alternative to what her life has come to be. But she doesn't know what else she might do" (310). Subhashが求めた経済的に安定した生活ではないが，Belaは自立していて規範意識に捉われず，自身の人生に対して主体的である。

Belaはその後に妊娠し，シングルマザーとして生きていくことを自分の意思で決めてSubhashに伝え，必要なサポートを求める。SubhashはBelaの選択に驚き，Belaをかつての Gauriの姿に重ね，過去の出来事が繰り返されていると感じて否定的な反応をする—"The coincidence coursed through him, numbing, bewildering. A pregnant woman, a fatherless child. Arriving in Rhode Island, needing him. It was a reenactment of Bela's origins. A version of what had brought Gauri to him, years ago" (317). Belaの妊娠を知り，これまで保持してきたBelaの出生をめぐる秘密をこれ以上，一瞬たりとも維持していくことができないと感じ，Belaにとって最悪の時であることを承知しながら，耐えきれずに打ち明けた—"For years he had worried about how much the information would upset her, but there was now a doubled worry, for the child she was carrying. She had returned to him, seeking stability. Now was the worst time. And yet he was unable to wait another moment" (319).

Belaは出生の秘密を知り，子どもの頃にGauriとSubhashのそれぞれと時間を過ごしていたが，３人で過ごしていた時間はなかったことを思い出し，二人の関係性の希薄さの原因を理解する。Belaも過去が繰り返されているという認識を共有するが，SubhashがBelaの本当の父親について隠していたことを咎められないことに気がつく。父親のいない自分の子ど

もの未来を考えると，Subhash に同情せざるを得ない—“She could not blame her father for not telling her until now. Her own child might blame her, someday, for a similar reason. Here was an explanation for why her mother had gone. Why, when Bela looked back, she remembered spending time with either one parent or the other, but so seldom with both at the same time”（322）．しかし，Subhash が本当の父親ではなかったという事実を告白されたショックから妊娠中には身を寄せることを考えていた Subhash の家を飛び出す。一人で当てもなく移動し，母に捨てられ，Subhash は本当の父親ではないという事実から，彼女のお腹にいる子どもの存在だけがこの世で Bela と真につながるものであると認識するようになる。

Subhash と Bela が意識するように，昔の Gauri と Bela は似た境遇にあり，一見過去を繰り返しているように見えるが，胎児の頃から子どもとの関係は異なっている。Gauri の妊娠出産が計画されたものではなく，終始受動的であったのに対して，Bela は自身の選択によるものである。Gauri にとって胎児は Udayan という過去の亡霊であり，異質な他者のようにも感じられているが，Bela は自分の一部として心身ともに受容し，現在と未来が想像されている。シングルマザーとなる Bela の妊娠の方が希望的な未来が見出されていることは，Gauri が胎児を it と表したことに対し，Bela は person と表していることからも明らかである。Bela は胎児を信頼ができて親しみがあり，身体的なつながりを確認できる唯一の存在と認識している—“This unknown person maturing inside her was the only being with whom Bela felt any connection as she traveled away from Rhode Island to calm herself, to take in what she'd been told. It was the only part of her that felt faithful, familiar”（322–23）．このように過去の出来事が再来していると意識される状況は，Bela を通して肯定的に変化している。

過去・現在・未来の時間

人間は動態的であり，その動態性を意識的に把握し直すため，時間は過去・現在・未来に区分化されて意味と構造を持つとされる。内面的時間意識においては，この「三岐-統一の動態性」が主題化されている。[11] 本作では，特に内面的時間意識が重視されているため，時間との関係で本作に表される過去・現在・未来の表象についても取り上げたい。

本作品では亡霊および幽霊（ghost）のイメージが複数提示されており，Udayan を中心に過去のインドに生きた登場人物が，過去から現在へと亡霊として現れている。Kathleen Brogan は現代エスニック・アメリカ文学において共通する幽霊の機能について着目した。幽霊は想像的な過去の回復を通してエスニック・アイデンティティを再創造し，この新しいヴァージョンの過去を現在へと押し出している。このような新しい幽霊の存在を「文化的憑依」(cultural haunting）として定義した（4)。文化的憑依は公民権運動の時代以降に現れ，表象される亡霊は文化越境的な存在であり，多文化を背景とする女性作家たちの共同体の記憶に関係する。幽霊の存在は過去の構築の虚構性と過去をめぐる複数の視点を強調し，国家的な歴史とは別の物語を提示する。このようにして，これまで語られず，抑圧されてきた人々の物語により，異なる歴史の存在を明らかにしている（17)。幽霊は歴史的損失の象徴であると同時に歴史回復の手段として，物語の中の幽霊の存在の有無自体も意味を持つ。エスニック文化の生存と変化を主題にする作家やその分断を認識する作家たちには，幽霊は文化伝達の複雑性を表すとりわけ豊かな比喩表現として考えられている（29)。このため，幽霊の文化表象は抑圧された歴史を回復し，保存するために戦略的に利用され，また，個人とコミュニティを再定義する効果をもたらしている。

Gauri は妊娠中の胎児を Udayan の亡霊として想像していた。胎児は Gauri と一体として存在しているようで離れていて，その存在は不確実で，不在のようでもあるというあいまい性を持って捉えられていた―“She felt as if she contained a ghost, as Udayan was. The child was a version of him,

in that it was both present and absent. Both within her and remote”（147）. Udayan の存在感と影響力は大きく，Subhash にも亡霊の不安がつきまとっていた。

Subhash は Bela と親子の信頼関係を築いても，Udayan の亡霊が Bela を取り戻しにくるのではないかという不安と妄想を抱えている—“And yet sometimes he felt threatened, convinced that it was Udayan’s inspiration; that Udayan’s influence was greater. Gauri had left them, and by now Subhash trusted her to stay away. But there were times Subhash believed that Udayan would come back, claiming his place, claiming Bela from the grave as his own”（270）.

Bijoli も近隣の子どもたちから亡霊のような存在として見られていた。自身も亡霊のように見られていることを認識し，Udayan の亡霊もその場所に存在すると信じ，語りかけている—“Bijoli understands that she scares these children; that to them she, too, is a kind of ghostly presence in the neighborhood, a specter watching over them from the terrace, always emerging at the same time every day. She is tempted to tell them that they are right, and that Udayan’s ghost does lurk, inside the house and around it, in and around the enclave”（214–15）.

一方で，Gauri も Bela によって亡霊のイメージで想像され，語られてきた。Bela は Gauri が 30 数年を経て，突然姿を現したことに幽霊が出たように驚き，過去が現在によみがえる体験をする。Gauri が去った後，その短い時間はなかったかのように消え去った—“Her mother’s brief presence had shocked Bela as a dead body might. But already she had vanished again”（376）. Bela は父と自分を捨てて出て行った Gauri に対し，強い恨みを持っていた。そのため，Bela の想像の中の Gauri はインドに戻って病死し，母の体は焼かれて灰になって消えたと具体的にイメージされ，Gauri は影や亡霊のような存在としていた—“Bela told Drew that her mother was dead. It was what she always said when people asked. In her imagination she returned Gauri to India, saying her mother had gone back

for a visit and contracted an illness. Over the years Bela had come to believe this herself. She imagined the body being burned under a pile of sticks, ashes floating away”（358-59）．このように，本作で現れる亡霊は忘却に抵抗する過去の記憶の具現化として表されているように見られる。

その他，Subhash と Gauri はインドを離れて 40 数年経ち，記憶の場所の変化を目撃することにより，過去から断絶され，時間意識が変化する経験をする。時間についての意識は，変化についての意識から切り離すことができないものであり，このことは Subhash と Gauri の時間との関係の転機となっている。[12] Subhash はかつてアメリカでの生活を始めた時に住んでいた住居が，地元の歴史的建造物となり，保存されていることを偶然の訪問によって知る。Subhash は歴史協会で寄付を募り，アートギャラリーと協働するなど，その古い民家を保護しようとする努力に圧倒される。アメリカで人生を出発させた彼にとって特別な場所である家を見学者の一人として見学し，その体験は過去に近づけず，存在を否定されていると感じさせた。長い年月を経て，Subhash の家が地域の文化史の一部となったことは，彼の過去に対する所有意識に影響しているように見られる。Subhash は過去が失われる儚さと維持する苦労を目の当たりにし，時間が人と場所に与える影響を実感している―“He was struck by the effort to preserve such places. […]. The effect was disquieting. He felt his presence on earth being denied, even as he stood there. He was forbidden access; the past refused to admit him. It only reminded him that this arbitrary place, where he’d landed and made his life, was not his. Like Bela, it had accepted him, while at the same time keeping a distance”（303）.

そして，Gauri もインドで同様の経験をしていた。故郷のトリーガンジが大きく変化したことを発見し，以前を知っていた人とも会えず，過去と自分との間の断絶を感じていた―“She was unprepared for the landscape to be so altered. For there to be no trace of that evening, forty autumns ago”（383）．Udayan の事件があった池と低地も全てなくなり，Gauri がその場所で明確に心の中に覚えていたものが，何一つ存在しなかったことに

動揺した。原点となっていた場所の時間による変化を目撃したことは，二人の過去に対する関係と時間意識に影響し，行動に影響を与えているように見える。過去は記憶の通りには存在しないという過去に対する共通した喪失感を描いている。特に Gauri には忘却しようとしてきた過去に直面する経験が真実を発見し，既存の価値観や執着心を手放す契機となり，その後の生に導いていると解釈できる。

この体験の後に Subhash も長い年月を経て自分の人生を振り返り，再出発のための行動を起こす。Subhash による Bela の出生の秘密の告白は，結果的に Bela からさらなる信頼を得ることにつながった。次に彼は長年別居し，音信不通であった Gauri との関係を清算し，離婚の書類手続きを求める。その後，Richard の葬儀が縁で出会っていた歴史協会で働く Elise とその後に再婚を果たす。Elise とはこれまでの年月を別々に過ごした後となる現在に出会ったことに大きな意味を感じ，再婚して残りの人生の時間を彼女と一緒に過ごしていく決意をする—“The years the couple have together are a shared conclusion to lives separately build, separately lived. There is no use wondering what might have happened if the man had met her in his forties, or in his twenties. He would not have married her then” (395)．Elise との晩年のハネムーンで訪ねたアイルランドでは，その風景から故郷と Udayan を思い出していた。

Subhash は死を意識し，過去からの断絶を経験して虚無の状態に陥っていたが，過去から現在に残してきた課題に向き合うことによって，人生を前向きに歩むための変化を遂げた。近代精神の合理主義は死の恐怖と未来に人類に不可避の死があるゆえに生を虚しいと感じる生の虚無の意識をもたらした。しかし，現在の生を肯定することができ，また，個々の人生が充足する未来について，ある具体的かつ完結的な想像力を持つことができれば，生の虚無がもたらす時間に対するニヒリズムから自由になれるとされる。[13] Subhash は過去の時間と記憶を通して自己探求のプロセスを辿り，死の恐怖と生に対する虚無の意識から解放された。育ての親として Bela に対する責任を果たし，過去の未済を整理して現在に向き合うことは，時

間意識の不調を克服させ，未来に対する見方にも影響を与えた。

さらに，Subhash は Bela の新しい価値観による自由な生き方と選択を受け入れることができるように変化した。Subhash には Bela が母の不在という大きな困難を克服する力強さを持ち，自分の意思を持って妊娠出産に至ったこと，そして，Bela からの信頼を取り戻せたことは，それまでの彼女の苦労を考えると奇跡的に感じられた。Subhash は Bela の意思決定を理解して尊重するようになり，彼女の未来も肯定的に想像されている―“He learned to accept her for who she was, to embrace the turn she'd taken. At times Bela's second birth felt more miraculous than the first. It was a miracle to him that she had discovered meaning in her life. That she could be resilient, in the face of what Gauri had done. That in time she had renewed, if not fully restored, her affection for him”（269–70）.

Gauri の未来予測についても否定から肯定へのシフトが示唆されている。トリーガンジでの自殺未遂の際に「現在」を初めて捉える不思議な体験をし，それは Gauri を過去の呪縛と罪の意識から解放し，再び生へと導いた。その後，Gauri にも最後に Bela から手紙が届き，彼女の娘 Meghna が成長して希望すれば将来再会する可能性が伝えられ，Bela から過去の罪に対する許しが与えられている。Bela を通じて世代を越えた家族のつながりと未来への希望が示されていることは，Subhash と Gauri 双方の，Bela という時間の象徴との和解とも読むことができる。

おわりに

時間の研究は，その諸形態と意味，時間意識や社会構造を明らかにする。*The Lowland* における 4 世代の人生を辿る家族史の物語は時間が主題化される背景となり，一つの出来事が複数の視点から語られ，多声的かつ多層的であり，それぞれに異なる物語が紡ぎ出されている。物語は過去と現在が混在し，インドとアメリカの時間の進行には規則性は見られず，各章の中で過去と現在を往来し，全容が次第に明らかになる構成となっている。

物語は Subhash と Udayan のインドでの幼少期の二人のエピソードで幕を開け，最後の章ではアメリカの Subhash の晩年とインドの Udayan の死のエピソードにより終わるが，この時の二人は 40 年以上の時間と空間を隔てている。しかし，Subhash が過去を繰り返し思い起すことにより，Udayan が現在の時間に再構築され，Subhash の記憶に Udayan が生きている。

Wai Chee Dimock は 21 世紀の北米中心のグローバリゼーションの時代において，アメリカ文学を特定の地域や時代の枠を超える「惑星的時間」（planetary time）から考え，「世界文学」の枠組みにより検討することを提案し，作品のさらなる豊かさや地域との関係性について理解するべきであるとした（1–6）。本作でも各地域とその関係性を背景として境界を超え，複数の時間と意識を通して登場人物たちの経験と成長，人間関係，そして，その葛藤と克服を含めた個人的な歴史が描出されている。

The Lowland の時間意識においては，社会文化規範とその個人に対する影響，過去・現在・未来の捉え方とその変化，身体的・精神的な危機的状況が反映されている。また，時間とアイデンティティはパラレルな関係にあり，時間意識はアイデンティティ形成をめぐる経験と呼応する様子が見られ，文化的アイデンティティの性質と問題意識を共有することを明らかにしている。本論で検証した通り，本作は時間をめぐり伝統的価値と文化適応，ディアスポラのライフスタイルとアイデンティティに関する問題を顕在化させている。そして，時間を問うことにより，アメリカおよびインドの時間に表れる既存の社会規範や価値を相対化することの重要性を強調し，現代アメリカに生きる個人と他者，そして社会との関係について，さらなる理解へと導くものである。

注

本研究は JSPS 科研費 JP15K21311 の助成を受けている。*The Lowland*（2013）の日本語訳については『低地』（小川高義，新潮社，2014 年）の既存の訳を参考にさせていただいた。引用の作品のページ番号は，英語については原

作，日本語訳については翻訳書によるものである。

Katrakの身体論およびBroganの「文化的憑依」（cultural haunting）に関する議論については，拙論「『見知らぬ場所』に生きる―Jhumpa Lahiriの短編作品における「新アメリカ人」の越境とグローバリティ」と重複する部分がある。

1　先行研究には，テーマと登場人物，複声的ナレーション（Ramya 2018）およびプロットとナラティブ（Pius 2017）などの物語と登場人物に関する研究や，ポストコロニアリズムとディアスポラ経験（Ghoreishi 2016），アイデンティティ危機と孤独（Andrews 2017），ハイブリディティとアイデンティティ（Rajammal and Thalapathy 2018）などのアイデンティティを中心とした研究がある。また，移民と文化的疎外および適応に関する研究（Tesalonika and Syafei 2017, Ramani 2018, Athira 2019）や，ナクサライト運動および家族役割と義務（Nimavat 2014），家父長制度的抑圧とGauriの旅（Ganvir 2015），母娘関係（Sharma 2017），精神病と教育の重要性（Devanesam and Seenivasan 2017），女性登場人物に焦点を当てたフェミニスト・アプローチによる研究（Rao and Joshi 2019）がある。その他，政治運動と暴力による影響（Alam 2019）に注目する研究や歴史の文学的表象の観点による研究（Maji 2015）がある。

2　*Keywords for American Cultural Studies*および『憑依する過去―アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』を参照。

3　本節冒頭の時間概念と「一時性」，時間とアメリカの歴史との関連の議論については，（Rohy, 2004, 242–45）を参照した。「一時性」（temporality）は時間を社会的交渉の産物と認識するものであり，この概念は時間を脱自然化し，多様な一時性がアメリカ文化の中で作用していることを明らかにする。具体的には心理的時間，歴史的時間，物語時間，生殖時間，クィア時間，時計と日付，期間，商品としての時間，モダニズム，記憶とノスタルジア，アナクロニズム，シンコペーションなどの音楽的時間，ヘゲモニーと時間，連続性，未来性，同時性，時間計測とテクノロジー，進化とテクノロジー，期待，未来形などの文法的時制，子ども時代と老化，連続性と非連続性，遅延，反作用などは全て，イデオロギー的意味を含有している（242–43）。

4　ショーペンハウアーの思想と身体の関連については，（廣松他編，1998, 611–12）を参照した。

5　「記憶容器」（memory container）については（Casey, 1987, 173），身体における記憶の具体化については（King, 2000, 27）を参照した。

6　Lahiri の作品である *In Other Words* の "Afterword"（203–31）を参照した。特に p217–21 で Lahiri が *The Lowland* の創作背景について語っている。

7　時間意識の 3 分類に関しては,『時間と自己』の「第 2 部　時間と精神病理」（木村，1984，63–172）および（中山，2003，236–38）参照。

8　（廣松他編，1998，611）参照。

9　（廣松他編，1998，612）参照。

10　ショーペンハウアーについては（廣松他編，1998，795），ニーチェは（廣松他編，1998，1212）を参照した。

11　（中村，2000，196）参照。

12　時間意識と変化については（ウィーナー，1997，242）を参照。

13　時間とニヒリズムおよびその解放については（真木，2004，298–320）を参照。

参考文献

Alam, Nasih Ul Wadud. "The Ramifications of Insurgencies on Udayan, Subhash and Gauri: A Reading of Jhumpa Lahiri's *The Lowland*." *CIU Journal,* vol. 2: 1, December 2019, pp. 12–18.

Andrews, Reena J. "Cultural Reflections and Identity Crisis in Jhumpa Lahiri's *The Lowland*." *International Research journal of Management Science and Technology*, vol. 8, issue 5, 2017, pp. 316–20.

Athira. S. S. "Pining for Homeland: An Analysis of Diasporic Sensibility in Jhumpa Lahiri's *The Lowland*." *Journal of The Gujarat Research Society*, vol. 10, issue 10, November 2019, pp. 240–42.

Bhaba, Homi K. "DissemiNation: Time, Narrative, and the Margins of the Modern Nation." *Nation and Narration*. Ed. Homi K. Bhaba. New York: Routledge, 1990. pp. 291–322.

Brogan, Kathleen. *Cultural Haunting: Ghosts and Ethnicity in Recent American Literature*. Charlottesville: UP of Virginia, 1998.

Casey, Edward S. *Remembering: A Phenomenological Study*. Bloomington: Indiana UP, 1987.

Dimock, Wai Chee. *Through Other Continents: American Literature across Deep Time*. Princeton: Princeton UP, 2006.

Devanesam, S. Leena and A. Seenivasan. "Jhumpa Lahiri's Low Land: Passion Towards Education Diminished the Depression of Gauri." *Research Journal of*

English Language and Literature, vol. 5, issue 3, July/September 2017, pp. 646–50.

Ganvir, Pratibha Somkuwar. "Jhumpa Lahiri's *The Lowland:* A Tale of a Mysterious Journey." *International Journal of English and Literature*, vol. 5, issue 1, February 2015, pp. 1–8.

Ghoreishi, Seyedeh Zahra and Zahra Bordbari. "Postcolonial Hybrids in *The Lowland*." *Advances in Language and Literary Studies*, vol. 7, no. 2; April 2016, pp. 41–47.

H. Ramya and Shibila. "Jhumpa Lahiri's *The Lowland*: A Thematic Analysis." *International Journal of English Literature and Social Sciences*, vol. 3, issue 5, September/October 2018, pp. 715–18.

Haberstam, Jack, J. *In a Queer Time & Space: Transgender Bodies, Subcultural Lives*. New York, New York UP, 2005.

Halbwachs, Maurice. "From the Collective Memory." *Theories of Memory: A Reader*. Eds. Michael Rossington and Anne Whitehead. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2007, pp. 139–43.

Hall, Stuart. "Cultural Identity and Cinematic Representation." *Black British Cultural Studies: A Reader*. Eds. Houston A Baker, Jr., Manthia Diawara, and Ruth H. Lindeborg. Chicago: The U of Chicago P, 1996.

Katrack, Ketu H. *The Politics of the Female Body: Postcolonial Women Writers of the Third World*. New Brunswick: Rutgers UP, 2006.

King, Nicole. *Memory, Narrative, Identity: Remembering the Self*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2000.

Kuortti, Joel, ed. "Problematic Hybrid Identity in the Diasporic Writings of Jhumpa Lahiri." *Reconstructing Hybridity: Post-Colonial Studies in Translation*. Amsterdam: Rodopi, 2007.

Lahiri, Jhumpa. *In Other Words*. Translated by Ann Goldstein. London: Bloomsbury, 2016.

---. *The Lowland*. New York: Vintage, 2013.

Maji, Prasun. "'The personal is political': Reading Jhumpa Lahiri's *The Lowland* as a Conscious Endeavour to Voice History through Fictional Representation." *The Literary Herald*, vol. 1, issue 3, December 2015, pp. 97–106.

Nimavat, Sunita B. "Jhumpa Lahiri's *The Lowland*—the Tale of Choice between Freedom and Duty." *International Journal of Research and Analytical*

Reviews, vol. 1, issue 3, July/September 2014, pp. 139–45.

Nora Piere. "From Les Lieux de Mémoire." *Theories of Memory: A Reader*. Eds. Michael Rossington and Anne Whitehead. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2007, pp. 144–49.

Parham, Marisa. *Haunting and Displacement in African American Literature and Culture*. New York: Routledge, 2009.

Pius, T. K. "Jhumpa Lahiri's *The Lowland*: A Critical Analysis." *Journal of Humanities and Social Science*, vol. 19, issue 10, ver. 7, October 2014, pp. 100–17.

Rajammal, P. Pandia and S. Thalapathy. "Hybridity in Jhumpa Lahiri's *The Lowland*." *Universal Review*, vol. 7, issue 12, December 2018, pp. 1161–66.

Ramani, Venkata Challa. "Cultural Alienation and Inner Conflict in Jhumpa Lahiri's *The Lowland*" *Language in India*, vol. 18, no. 10, October 2018, pp. 23–31.

Rao, Doppalapudi Subba and Pravin Joshi. "A Study of Jhumpa Lahiri's Women from Feminist Perspective." *Journal of The Gujarat Research Society*, vol. 21, issue 16, December 2019, pp. 532–40.

Rohy, Valerie. "Time" *Keywords for American Cultural Studies*. 2nd ed., Eds. Bruce Burgett and Glenn Hendler. New York: New York UP, 2004, pp. 242–45.

Ruchatz, Jens. "The Photograph as Externalization and Trace." *A Companion to Cultural Memory Studies*, Eds. Astrid Erill and Ansgar Nünning. Berlin: De Gruyter, 2010, pp. 367–78.

Sharma, Ambika. "The Mother-Daughter Relationship in Jhumpa Lahiri's *The Lowland*." *Research Journal of English Language and Literature*, vol. 5, issue 2, April/June 2017, pp. 703–6.

Tesalonika, Kurnia Ningsih and An Fauzia Rozani Syafei. "Adjusting with a New Place in *The Lowland* (2013) by Jhumpa Lahiri." *E-Journal of English Language and Literature*, vol. 6, no. 2, 2017, pp. 52–59.

フィリップ・P.・ウィーナー編『西洋思想大事典・第 2 巻』平凡社，1997 年。

木村敏『時間と自己』中央公論社，1984 年。

小林富久子監修，石原剛他編『憑依する過去―アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』金星堂，2014 年。

廣松渉他編『岩波哲学・思想事典』岩波書店，1998 年。

中村元『比較思想事典』東京書籍，2000 年。

中山康雄『時間論の構築』勁草書房，2003 年。
エトムント・フッサール『内的時間意識の現象学』谷徹訳，筑摩書房，2016 年。
真木悠介『時間の比較社会学』岩波書店，2004 年。
ジュンパ・ラヒリ『低地』小川高義訳，新潮社，2014 年。
渡部あさみ「『見知らぬ場所』に生きる―Jhumpa Lahiri の短編作品における「新アメリカ人」の越境とグローバリティ」『人文論集』北海学園大学人文学部，第 66 号，2019 年，pp. 49-79。